

1906-2018

坂口安吾

ANGO SAKAGUCHI

生誕祭



112

白い灯台、ピカピカの海、涯もなく続く砂丘、
葉蔭やぶの中に佇む安吾の耳に、
しきりに母を呼ぶ声が聞こえる。
古い思い出の匂がした—
時代を超えて人の心を捉えて離さない
安吾のふるさと、
懐かしい人間存在のふるさとを尋ねよう。

文学と音楽の出会い

2018年10月20日(土) 13:15~15:30(12:45開場)

会場:リゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 スタジオA
(新潟市中央区一番堀通町3-2)

参加費:無料 定員:100名(先着順、要事前申込)

第1部「ふるさとに寄する讃歌」

一夢の総量は空気であつた」 坂口安吾

朗読/中津川英子(フリーアナウンサー)

伴奏/佐藤俊次(フィドラー)

第2部 講演「安吾のふるさと」

講師/七北数人(文芸評論家)

■お申し込み:電話にて申込み。9月10日(月)8:00受付開始。
025-243-4894(新潟市役所コールセンター 8:00~21:00)
代表者の氏名・電話番号・参加人数(2名まで)をお伝えください。

懇親会

どなたでもご参加いただけます
10月20日(土) 17:00~19:00

会場:レストラン リバージュ(新潟市中央区一番堀通町3-2 リゅーとびあ3F)

参加費:5,000円(当日払) 定員:30名(先着順、要事前申込)

■お申し込み:電話にて申込み。9月10日(月)9:00受付開始。
025-226-2563(坂口安吾生誕祭実行委員会 新潟市文化政策課内 9:00~17:00)
代表者の氏名・電話番号・参加人数(2名まで)をお伝えください。

「安吾風の館」企画展見学と
ゆかりの地めぐり

2018年10月13日(土) 13:30~15:30

集合場所:「安吾風の館」

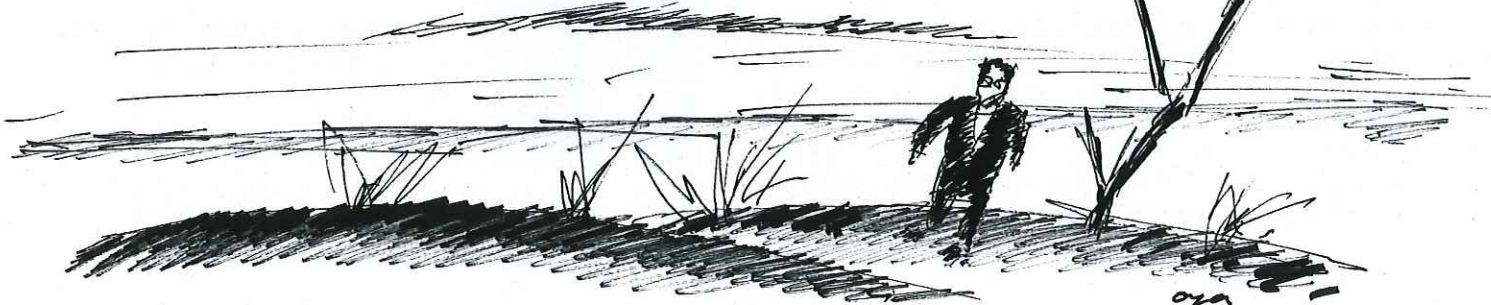
(新潟市中央区西大畑町5927-9 tel.025-222-3062)

案内人:坂口綱男(安吾風の館・館長)

参加費:500円(ガイドホン代ほか・当日支払い)

定員:20名(応募多数の場合は抽選)

■お申し込み:往復はがきで申し込み。
往信裏面に郵便番号、住所、電話番号、代表者名、希望人数(2名まで)。
返信表面に代表者の住所、氏名を記入し、
〒951-8550 新潟市文化政策課「安吾まち歩き係」まで。(住所は記載不要)
締め切りは9月21日(金)必着。



主催:坂口安吾生誕祭実行委員会

新潟市、新潟市芸術文化振興財団、安吾の会、松之山安吾の会、桐生安吾を語る会、文化現場、安吾全集を親しむ会、
新潟日報社、BSN新潟放送、にいがた文化の記憶館、FM KENTO、ラジオチャット・エフエム新潟

協力:新潟・市民映画館 シネ・ウインド デザイン制作:クリエイティブランド 晴れ日

お問い合わせ:坂口安吾生誕祭実行委員会事務局(新潟市文化政策課) tel.025-226-2563

1906-2018

坂口安吾

ANGO SAKAGUCHI

生誕祭

112

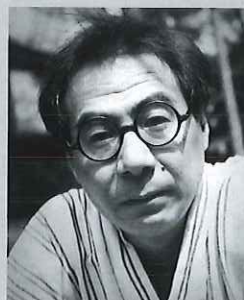
文学と音楽の出会い—ふるさとに寄する讃歌

「私は蒼空を見た。蒼空は私に沁みた。
私は瑠璃色の波に噎ぶ。
私は蒼空の中を泳いだ
そして私は、もはや透明な波でしかなかった」



1931(昭和6)年、24歳の坂口安吾は、同人誌「青い馬」創刊号に「ふるさとに寄する讃歌」を発表した。新潟を舞台にした初期の自伝的小説の一つで、のちに「無頼派」と呼ばれる安吾のイメージとは異なる、瑞々しくもピュアな作品である。身も心も蒼い空と瑠璃色の海に染まる若き日の安吾が、愛憎半ばする「ふるさと」からの旅立ちと、「青春」との決別を宣言する。

安吾生誕から112年— 2018年の「生誕祭112」は、朗読とフィドルのジョイント「ふるさとに寄する讃歌」、七北数人氏(文芸評論家)の講演「安吾のふるさと」の2部構成です。



さか ぐち あん ぐ
坂口安吾

1906年10月20日新潟市西大畑町(新潟市中央区西大畑町)に、13人兄弟12番目、五男として生まれる。本名炳五。父は衆議院議員であり、新潟新聞社長、また漢詩人としても著名な仁一郎(号:五峰)、母はアサ。長兄献吉は新潟日報社長、のちラジオ新潟(BSN新潟放送)を創立、社長。

新潟中学から東京豊山中学へ転校。卒業後小学校代用教員を勤めたのち、東洋大学印度哲学倫理学科へ入学。大学在学中にアテネ・フランスへ入学し、フランス語、ラテン語を学ぶ。

1931年「風博士」「黒谷村」で文壇デビュー、1946年「墮落論」で敗戦に混迷する人々に大きな衝撃を与えた。銀座の酒場「ルパン」に集う太宰治、織田作之助らとともに無頼派と称され、新文学の旗手として一躍脚光をあびた。「日本文化私観」「白痴」「信長」「不連続殺人事件」「桜の森の満開の下」など、純文学をはじめ、評論・エッセイ、歴史小説、推理小説、説話物語、地理紀行など、幅広いジャンルに代表作をもつ、日本では稀有な作家。



なな きた かず と
七北数人

講演

文芸評論家。1997年から筑摩書房『坂口安吾全集』の編集に携わり、別巻に年譜を執筆。2002年、集英社より『評伝坂口安吾—魂の事件簿—』を刊行。坂口安吾デジタルミュージアムに作品紹介を毎月発表するほか、岩波文庫の安吾作品集(全3冊)、実業之日本社文庫「無頼派作家の夜」シリーズ(全3冊)、烏有書林「日本語の醍醐味」シリーズなど編著書多数。今秋から春陽堂書店「坂口安吾歴史小説コレクション」(全3冊)を編纂、順次刊行中。

講演「安吾のふるさと」の概要

新潟市寄居浜に建つ安吾碑には「ふるさとは語ることなし」と彫られている。この言葉に、安吾の新潟への敵意を感じると人もいるが、本当のところ、安吾の真情はどうだったのか。安吾にとっての「ふるさと」とは何なのか。

安吾作品に「ふるさと」が登場するとき、自分探しの要素が含まれることが多い。とくに一連の自伝的小説は、両親の血や、新潟の風土を、自分の内部の自分として探究していく姿勢がある。まさに切っても切れない、自分と不可分のものとして安吾は「ふるさと」をとらえていた。

小説「ふるさとに寄する讃歌」に出てくる「ふるさと」の二重性と切ない思い、エッセイ「文学のふるさと」で語られる「絶対の孤独」なども読み解きながら、安吾が描いた多面的な「ふるさと」を探っていく。



なか つ がわ ひで こ
中津川 英子

朗読

フリーアナウンサー。BSN新潟放送入社後、テレビ番組「BSNニュースワイド」キャスター、ラジオ番組「佐渡へこいちゃ」「ヒットパレード」などに出演するほか、司会・CM・ナレーションに従事する。退社後は、新潟市の広報テレビ番組「さわやか新潟」のレポーターとナレーションを担当。

「安吾賞」では、第1回より司会を担当するほか、「安吾 風の館」で安吾作品を朗読。

趣味はジョギングで「新潟シティマラソン2017」フルマラソンを完走。「読み聞かせボランティアスキルアップ講座」講師。「伝わる言葉の授業」小学校ゲストティーチャー。



さ とう しゅん じ
佐藤俊次

伴奏

1963年新潟市(旧新潟市)生まれ。高校生でブルーグラスに惹かれ、大学のサークルでバイオリンを手にして以来、フィドルを人生の友とする。映画「永遠のジャンゴ」公開時には、シネ・ウインドのミニライブに、トリビュートバンド「じゃんごっこ」のフィドラーとしても出演。自作曲含むCDに「Moments Of Sunset」がある。

主催:坂口安吾生誕祭実行委員会

新潟市、新潟市芸術文化振興財団、安吾の会、松之山安吾の会、桐生安吾を語る会、文化現場、安吾全集を親しむ会、新潟日報社、BSN新潟放送、にいがた文化の記憶館、FM KENTO、ラジオチャット・エフエム新潟

協力:新潟・市民映画館 シネ・ウインド デザイン制作:クリエイティブランド 晴れ日

お問い合わせ:坂口安吾生誕祭実行委員会事務局(新潟市文化政策課) tel.025-226-2563